

井上和子先生のご退任にあたって

長谷川 信子

私が神田外語大学に着任しましたのは6年前の1996年ですが、それ以前にも井上先生とは学会等でお目にかかることもありましたが、何より言語学を専門とする者として、先生の著書や論文から多くのことを学ばせていただいていたので、井上先生の偉大さは充分認識しているつもりでした。実際、先生の言語学者としての業績や功績の素晴らしさは、巻末の業績リストからだけでも、容易に見て取れます。しかし、先生の身近で、過去6年にわたって仕事をさせていただき痛感したことは、こうした研究業績は先生の偉大さのごく一部しか示していないということです。先生は、こうした旺盛な研究執筆活動と平行して、本学の学長をはじめ、国内外の学会等の活動や様々な教育研究機関での役職・公職を歴任され、それはまさに超人的という他ない経歴をお持ちなのですが、そうしたことをいくらリストしてみても、やはり先生の本当の功績の形容には不十分です。いくら言葉を尽くしても尽くし足りないと思われませんが、私には、次の三つのことが井上先生の研究と教育、そして言語学という分野への決して誰にもまねることの出来ないご功績と思われまます。

生成文法と日本語研究

井上先生はミシガン大学で学位を取得される以前から英語教育をはじめとした高等教育に携わっておられたと伺っていますが、先生の研究活動の中心はやはり、日本における生成文法の発展と日本語研究という分野の確立にあると思われまます。先生は、生成文法がその発祥の地である米国でもまだ限られた大学でしか認知されていなかった1960年代に、その枠組みでの日本語分析を学位論文とし（1969年にMoutonより出版）、またいち早くBachの『変形文法』を翻訳されるなど、日本に生成文法を紹介すると同時に、英語とは言語体系の異なる日本語がこの文法により分析可能であることを示されました。そして、1971年～73年には『英語教育』

(大修館書店)に「変形文法と日本語」を連載され、それを1976年に二冊の著書としてまとめられました。この二冊の本(および1978年の『日本語の文法規則』(大修館書店))が、日本での生成文法による日本語研究という分野の確立と発展に果たした役割の重要性は計りしれません。生成文法はヒトの言語能力を探ることを目的としているわけですから、日本語も当然、生成文法の対象言語になるわけです。しかし、当時の日本では、一部の研究者を除いては、生成文法イコール英語学であり、日本語研究は国語学の一部に過ぎなかったと思われまゝ。そうした時期に、日本語の現象を網羅的に扱い、生成文法の問題提起なしには得ることのできない言語事実の発見や新しい一般化を、一つの文法体系内で豊富なデータとともに提示した上記の著書は、生成文法による日本語研究を一気に飛躍的に進展させることになりました。同時期に、やはり先駆的で影響力のあった黒田成幸氏や久野暉氏の研究も日本語生成文法の発展の上では欠くことのできないものですが、黒田、久野両氏の活動拠点が米国であったこと、当時多くの研究が英文で発表されていたことなど、日本の学会や研究、教育への影響力、貢献度の観点からは限りがありました。また、この時期は、日本の国際的経済力の伸展に呼応して、日本国内外での日本語教育の必要性、重要性が高まり、外国語としての日本語教育、それに対応できる日本語文法の確立が急務とされていました。その要請に対し、国語学は非力で、生成文法による日本語研究への期待が大きくなっていきました。先生の編著書である『日本文法小辞典』(1989年、大修館書店)に端的に集約されているように、先生の研究はその分野での基盤を提供し、日本語教師にとっても必読のものとなっています。これまでも、またこれからも、日本語生成文法研究を志す者、あるいは日本語教師として一流を目指す者は、上記の著書をはじめとした井上先生のご研究に触れずに研究を進めることは不可能と思われまゝ。

言語学教育と人材育成

生成文法と日本語学を日本で確立、発展させるという大事業に、井上先生ご自身の研究がその基盤にあったことは上述の通りですが、それと同時に、先生がこの分野での優秀な人材を、日本全国は言うにおよばず広く世界へも輩出なさっているということも今日の(そして今後の)生成文法研究の発展を支えている大き

な要因と言えるでしょう。私のように、直接ご指導を受けなかったものの、先生の研究に触発、啓発され、間接的に教えを受けた研究者を含めれば、日本語を生成文法の観点から考察している研究者は全て先生の何らかの「弟子」と言えるかもしれません。しかし、先生が教鞭をとっていらした国際キリスト教大学、津田塾大学、そして本学で直接ご指導を受けた幸運な研究者の活躍は特筆に値します。先生の喜寿に際し1999年に編纂された*Linguistics: In Search of the Human Mind-Festschrift for Kazuko Inoue* (開拓社) に寄稿された論文の多くは先生の愛弟子にあたる方々によるもので、その質の高さもさることながら、先生が育てて来られた研究者の多彩な顔ぶれに驚かされます。そのPrefaceにもありますが、先生のご指導の素晴らしさは、「良い点を伸ばす」ことにあったと察せられます。これは、教師なら誰でも分かることですが、簡単なようで非常に難しいことです。殊に先生のように、言語そのものに造詣が深く、生成文法のみならず、構造言語学から国語学、言語教育などにも精通されていらしたら、学生の欠点や分析の難点を指摘することの容易さに比し、長所や良さに注目し、励まし、伸ばすことは至難のように思われます。先生のおおらかなお人柄も一役買っていることとは思いますが、先生はそれを自然体でおやりになり、学生はそうされることで自信をつけより素晴らしい方向へと伸びてゆく。現在教える側に立っている私たちも手本としたい、理想的とも思える教授と学生の間を、先生は築いて来られたのです。

言語学研究の潮流

もう一つの井上先生の言語研究に対するご貢献は、おそらく先生の尽きることのない言語への興味と生成文法の発展を願う真摯な研究者魂によるものだと思われませんが、生成文法を一分野の研究に止めず、学問と教育、ひいては社会というより広い見地から位置づけることの重要性を深く認識し、あらゆる機会を捉えて、言語研究と生成文法理論研究を推し進めるべくたゆまぬ努力を続けていらっしゃるようです。1997年から5年間にわたり推進され今年度末に一応の終了をみる中核的研究拠点形成 (COE) プログラム「先端的言語理論の構築とその多角的な実証」もそうですが、これまでも井上先生を研究リーダーとする大型の研究プロジェクトは常に、言語学を核として、日本語教育や言語習得、言語障害、コンピュータ・サイエンス、脳科学など、言語学と関わる関連分野との連携の可能性

を探り、言語学の知見がより広範な学問分野への確かつ適切に波及し、また言語学がそれにより他分野との接点を複層的に広げながら、学際研究の中心的役割を担う研究体制へと発展していくことを願って計画されてきました。この遠大過ぎると思えるビジョンは、言語研究を国際的な視点で見渡すと、確かにその方向へ動き始めているのです。生成文法の歴史は半世紀足らずに過ぎませんが、その理念の指し示す研究課題は言語に止まらず学問分野の垣根を越えて広く浸透しつつあります。生成文法の発祥とほぼ時を同じくして研究活動を歩んで来られた井上先生は、常にその方向性を誤ることなく見定めていらしたのです。

本学の言語科学研究科も、先生のそうしたビジョンの下、それを少しでも具現すべく、教育、研究両面で土台を固め、体制を整えて来ることができました。先生のご退任が近づき、そこに今後どのような木を育て花を咲かせるかは、先生から様々なことを様々な形で教え導いていただいた私たちにかかっていると思うとその責任の重さに身の引き締まる思いがします。まだまだこれからも先生のご指導を仰がせていただくことになるかとは存じますが、ご退任にあたり、先生のこれまでのご指導に深く感謝いたします。日本学術会議その他の公職でお忙しい日々が続くとは思いますが、どうかこれからもご健康に留意され、いつまでもお元気で私たちをお導きください。